

既に尾崎君に依つて議場に闡明されて居る。即ち今日の政戦は閩族對國民の戰鬪であつて、我は尙ほ此上に兇の緒を緊めて最後迄閩族に挑戦せなければならぬ。而て今や桂公は立憲同志會なる一團を結び、吾輩が多年握手し來りたる、所謂脱黨五領袖の人々は、桂黨の幹部として鞅掌して居るが、彼等は抑々何物を標榜して國民に莅まんとするのであるか、果して何物を旗印として我々に對せんとするのであるか、未だ其の主義綱領の詳細を見ないが、桂公の發表した宣言書中の綱領は、大要六箇條より成り立つて居るから、此の各條に照して桂黨の方針の在る處を伺ふと、遺憾ながら其の多くは無意義である、虚偽である。成程其言ふ所の文句は立派であつて、何人も同感すべき事柄である。其の何人も同感すべき知れ切つた事柄を今更らしく聲言するのが、寧ろ無意義である證據と云ふの外はない。茲に進んで其の各條各項に就いて評論を試み、其の無意味なる所以を論ぜんと思ふが、先づ其の第一項たる

(一) 建國の本源に溯り皇室を中心として忠愛の大義を顯昭す

に就いて論じて見ると、此事は如何にも我が六千萬同胞が一人として異論を唱ふる筈がない。

如何にも立派なる事である。日本國民の腦裡には先天的に彫み込まれたる大義であつて、何れも彼の同志會のみが専有すべき事でない。然るに今や此の一箇條を殊更に掲げ來つて、忠君愛國は如何にも閩族の専有物かの如き素振りを見せ掛けて居る、然れども斯の如き事は今更閩族に聞くの必要はない。今にして口にすべき事柄でなくて、國民の常に實行すべき事柄である。若し假りに閩族一流の如く、唯だ之れを口にさへすれば可なりとすると、朝鮮も支那も今日の狀態には陥つて居ない譯である。支那や朝鮮では能く此の忠孝と云ふことを言語や文字に使つたが、眞に之れを實行する事をせなかつた爲め、國は遂に今日の有様となつて終つて居る。全體閩族は事苟も皇室に關すると、徒らに空涙を流して忠義顔する癖があるが、之れは尤も卑む可き陋劣なる虚飾であつて、斯かる空涙を掲けたる綱領は、先づ以て無意義なる綱領と云ふのである、次に閩族が第二項に掲けたる

(二) 維新の鴻圖を紹述して開國進取の皇謀を翼賛す

もまた云はずもがなの事である。今日我が國民誰か鎖國夷攘を唱へて居るか。今を去ること

五十年以前國論が鎖國と開國とに分れ、動もすれば外人を排斥したる時代に於ては、開國呼ばりも聽えるが、大正の今日事新しく開國を口にするのは餘りに迂遠ではないか。今日の時代は最早や空涙や空文を以て誤魔化し得べき時でない。彼等閥族黨にして直ちに開國進取の抱負あらば、宜しく其の實行の方法を確立せなければならぬ、我が同胞は年々五六十萬人の増殖を告げ、勢ひ國民は對外的發展を圖らねばならぬ時であるから、先づ茲に我が外交方針を一定し、東に行くか北に行くか、其の進むべき對外國是を確立し、其上で適當の軍備施設を完うし、國民進取の方向を事實の上に顯現すべき秋である。然かも彼等が此の根本的方針を確立せずして唯だ徒らに文面や口先きのみ開國進取を呼んで見ても、夫れは畢竟無意義である。次に第三項に

(三) 憲法の章條を恪守して 天皇の大權を尊重し國務大臣の責任を嚴明にして  
國民權義を保全す

とあるが、之れまた言はずもがなな事である。憲法の章條を恪守する事は、苟も政黨とし

て立つ以上、どの政黨でも必らず遵守すべき事柄で、何も此の新政黨獨りが物珍らし氣に吹聽すへき事でない。夫れを殊更に吹聽する事が既に無意義であるのみならず、現に桂公は何事をして居るか、宣言書には尤も麗々しく憲法の章條を説いて居るが、桂公の爲す處は悉く憲法の章條を蹂躪して居つて何一つとして之れを恪守した跡がない、議會の停會を命すること三たび、議會開期中官權を濫して良民を殺傷したるさへあり、之れでも憲法の章條を恪守したと謂ふならば、斯くの如き憲法恪守は迷惑至極の恪守であつて、眞の恪守とは全然方角を異にして居るのである。而かも尙ほ口太く憲法を説くに至つては、誰れかまた其の矛盾の甚だしきに驚かざるものあらん。今更ら申す迄もなく彼黨の憲法呼はりは、自ら無意義に陥つたものである、夫れに第四項の

(四) 教育を普及して國民の公德を進め以て國民の立憲的智能を啓發す

と宣言して居るが、之れもまた空理空言としか受取れぬ。全體人の上に立つものは、唯だ徒らに言語文章を以てするのみならず、先づ實踐射行が第一である。然らば桂公平生は果して之

れを口にする資格があるか、どうか、斯の如きは宗教家が教育家の口より聞いてこそ傾聴にも値しようが、桂其人に聞かんとは沙汰の限りである。誠に小學教育を見るに唯だ服従を教ふるの斗りで、權利を教へず義務の事のみを教へて居るのは立憲思想の抑壓である。其他青年團體や軍人團に對する閥族の遣り方は、悉く此の立憲思想の發達を抑制して居るのであつて、彼の如き閥族の口より今更立憲思想の發達などと呼號されても、我々は其處に何物の眞意義を認めないのである。序ながら軍人團の會長に政治家たる寺内を頂かして居ることは矛盾の甚しきものである。却説其の次の第五項には

(五) 民族同胞の情義を推擴して社會共濟の道を盡す

と云つて居るが、桂公從來の政策は此の宣言と正反對に出でて居る。即ち桂公は從來極めて富豪や上流階級の利益を計り一般人民に對しては毫も重きを置いて居ないのである、良民を塗炭の窮境に陥し入るゝも顧みざる政策を採つて來たのである。此の事は苟も平素政治に志あるもの、夙に認識せる處であつて、今日斯かる經歷の桂公より、斯かる政策を聽くに至つて、

我々は其の虚偽の餘りに甚だしきを看取して、寧ろ言ふ處を知らぬのである。尙ほ其の次の六項には

(六) 民力を内に充實して國光を外に發揚し威信を中外に貫徹して世界の平和に

貢獻す

とあるが、桂公は果して此宣言と一致する政治を行はんとするや否や、眞の民力を充實せんとせば、惡税は之れを改廢して、十分なる整理を行ふ可きに、桂内閣の税制方針は唯だ單に交通稅所得稅の少部分を減せんとするに止まるが如く、唯だ一つ五千萬圓の制度整理を斷行すと云ふ丈けは、目新らしき處であるが、併しながら此五千萬圓乃至六千萬圓の政費を節減せなければ、何人が内閣を組織しても決して我が財政は立ち行かぬのであるから、桂公が此の整理斷行を揚言せるのは即ち當然なすべきことを爲すと云ふ丈けの話で、何も仰々しく呼號すべき政綱ではないのである。尙ほ國威とか世界の平和とか勝手な宣言を掲げて居るが、然らば彼等は衣帶水の隣邦たる支那の事變の當時に於て、果たして如何なる態度を取つたか。彼等閥族は

革命軍に反對なる帝政主義を採つて支那に對し、其の結果中華民國をして帝國と疎隔するの結果を生じ、之れが爲め帝國の威を傷けたるは決して輕少でない。斯くて帝國と民國と相反する状態に陥らしめたと云ふことは、決して東洋の平和を保全する所以ではないのである。畢竟するに立憲同志會の政綱は實際に行ひ得ざる空理空文の虚偽なる事項を羅列せるに過ぎずして、決して信を措くに足るべき政綱でない。尙ほ彼の新政黨に馳せ參じたる數人者は、文官任用令の一部を改正するやに唱へて居るが、斯の如きは一枝葉の事であつて、我々は今後一層奮起して以て閥族の本城を粉碎せねばならぬ。

### 國民思想の危機

(大正七年八月)

(一)

近來「修養」といふ文字が大流行で、之れを筆にし、之れを口にする者は非常に多いやうであるが、吾輩は特殊に鹿爪らしく修養などいふことを説いて見たくもない。

釋尊でさへ、東奔西走終身説教された最後には「一字不説」と言はれたではないか。孔子も亦「民は由らしむべし知らしむべからず」と言はれて匙を抛けられた。況んや吾等の口で説けるものではない。口先や形式などで眞の修養が出来るものなら、釋迦も、孔子も、達磨も、程朱も何もいらぬ。

官僚や御用學者中には、例の忠君愛國を説いては、如何にも尤らしく涙を出す者もあるが、こんな形式に熱中したとて、眞の忠君愛國の根本精神が發生されるものではない。又忠君愛國のみが道德の全體でもない。其外にも道德行爲はある筈だ。父子の關係、夫婦の關係、兄弟の關係、朋友の關係、社會の關係、世界人類に對する關係に於ける道德の如き、種々なるものがある。

今日我國一般の家庭の有様はどうだ。何人でも先祖代々の宗教は皆持つて居る。天台宗とか、眞言宗とか、禪宗とか、眞宗とか、夫れ々所屬宗門と菩提寺はあるが、皆て其實際はどうか。寺と檀家との關係は信仰の結合ではない。葬式追善と云へる儀式の外には何の關係もない。即ち僧侶は葬式追善の技師として招かる、のであるから、勿論何の尊敬もない。これでは所屬の

宗教はあつても實際は無宗教である。凡ての児童は斯かる無宗教、無信仰の家庭に生れ、それから小學校に入つて形式的忠君愛國の教育を受けるのである。形式であるから、教師の言ふ通りにするが、少しも頭腦には入らぬ。斯様の有様で、德育の何のと言つても駄目である。

## (三)

今度の世界大戦が、各方面に種々の影響を及ぼし、變化を與ふることは言ふまでもないが、就中其思想上に及ぼす影響に就て、官僚共の最も心配して居るのは、所謂危険思想の侵入と言ふことである。露國の革命が非常に強い刺戟を此人々に與へたのである。神經過敏な役人共は、此革命思想が先づ支那に波及し、支那から我國に傳播し來りはせぬかと恐れて居るのである。其心配は一應尤もであるが、儲其所謂危険思想の侵入を如何にして防禦するかといふ其方法には甚だ感服出來ぬ。彼等役人一流の防禦方法といふのは、此危険な思想の入るのをば、圖書、新聞等の輸入を禁遏するに限るとして、警察の力を以て之れを抑止せんとするのである。役人の智慧は大抵こんなものである。我輩の考ではこんなことで、危険思想の防遏などは思

ひも寄らぬ。のみならず左様な間違つた方法こそ却て危険思想を生む虞れがあると思ふ。

## (三)

戦事中は、勞銀が上つて居るから下級民の懐る工合も良くなつて居るが、戦後も此高い勞銀を得られるかと云ふに、それは到底得られぬのである。此生活状態に變化の起る時が最も恐るべき時である。教育のある者は物事を考慮してするから比較的安心だが、教育のない下級の勞働者は夫れが出来ないから危険である。勿論三千年來の歴史を以て鍛へ上げた我國のことであるから、容易には他國の空氣に、感染するとも思はれないが併しながら絶対安全だと空嘯いても居られぬ。さらばと言つて、官僚の流儀で、新聞讀むべからず、書籍讀むべからずと、姑息な膏藥貼りの、箱入り娘的教育では防禦が出来るものでない。

そこで官僚の徒は、盛んに忠君愛國を説くのであらうが、千篇一律の形式的な説法では到底効果が擧がるものではない。學校の教科書には、忠君愛國が書いてあるし、先生もそれを教へて居るが、是等の人々が眞に根本的に感化を與へる程に、説き得るかどうかは疑問である。或

る教育會とかで、忠君愛國は何故爲なければならぬかと質問した者があつたさうだが、何人も夫れに感服する程の筈は出来なかつたと云ふ話さへある。忠君愛國の根本精神に立入つて説明するのに、形式的ではいけない。昔は忠君愛國を形式的に教へはしなかつたが「君の馬前に死す」といふ一語に依つて、皆良く諒得して居つたものである。

## (四)

人倫道德の講師たる者の頭には、忠君愛國の發生する所の根本道德を研究せしめて置かねばならぬ。是れは六ヶ敷問題なるが故に、兒童の頭に徹底せしむることは無論出来ぬが、教師の頭には少しは無くてはならぬ。教師が少し心得て居れば、自然に兒童も感化される譯である。然して此根本道德を體得せしむるには、形式的な教育ではいけない。形式といふものは、形を整へば整ふ程實効が擧がらぬものである。又膏藥貼りの、箱入り娘的姑息の防壓は無論いけない。例せば吾が娘に德育を施さずして、唯徒らに室内に秘め置き、外に出せば蟲が付くと言つて、道德品行を教へないで、只戸外に出さず人に接せしめずして、危険を防止することが出来

るであらうか。それよりは外に出しても蟲の付かぬ様教へて置くが安全であらう。

今や隣國には極めて危険なる思想が發生して居る。又前にも述べた如く、戦後國民の生活状態の變化に伴うて、我國にも危険思想に感じ易き空氣が起らぬとは限らない。之れに對應すべき策を講ずるのは刻下の急務であるが、それは外ではない。宗教と德育であり、又自由研究である。

## 青年の本分と老人の領域

大正十一年三月七日雑誌「木堂」創刊一週年祝賀會に於ける講話。

『木堂』といふ雑誌が滿一年になると云ふので、今夕此會を開かれたのであるが、此雑誌が出来る時分には私も成るだけ書かうと云ふ約束をしてツイ空約束になりました。いつも忙しいものであるから、書かうと思つては其儘印刷の時に間に合はぬやうな工合になつて、甚だ不精をじて居ります。併しながら、他の諸君が甚だ御勉強下さつて段々雑誌が廣まつて行くと云ふ有様になるのは、喜ばしう存じます。私は又斯様な自分の名を冠せられた會が斯様に盛んになる

と云ふことに就いては、自分は非常に光榮に感じ、また却つて自分の不肖これに堪ふるや否やといふことに就いても、非常に恐縮して居ります。唯今副島博士の御話の通りで、世の中は次第に政治世界のみならず、總ての社會が混沌として、是れから新たなる時期に入らんとして居るのであるから謂はゞ之れから總てのものが創設されると云ふ時である、それだから政治と云ふ一つのものでなくて、各々が従事される處の仕事が、何れも大局から見れば新たになつて來ると云ふ時代でありますから、互に寄つて時々自分の意見を交換すると云ふことは必要になつて來たと存じます。私は自分として従事して居る所の政治では、殆んど四十年間やつて居るが、實は何の効果が無い、何の効果も擧げることが出来ぬと云ふ有様になつて居りますが、それで段々と老朽になつて來ると云ふ有様であるから、斯様な會合が澤山出來て、而してどうか後繼者だけ出來れば、いつでも早く此責任を解除して貰ひたいと云ふ考へであります。私は此際に於て、功名心に驅られて何をしようと云ふ考へは毛頭無くなつて——、之は老朽の致すところでもウ段々と總てのものが衰へると云ふ年代になつて居りますから、そこで後繼者が多く集まつて、同志の士が多く集まつて來る間に自然に生じて來る。それが其所にも起る、此所に

も起ると云ふことは、私に取つては是位有難いことではない。どうか早くさう云ふ中から私の責任解除を少しも早くやつて下さると云ふ事を、今日では切に私は希望して居る。最早自分の此年齢ではどんなことをしようとしても出來る譯のものではない。單り狭い自分の團體ばかりぢやない總てのものに就いて何うしても仕事をさせると云ふのは老人の天下では出來ない。が老人天下の習慣と云ふものはひどいもので、私が演説をしても極めて平凡なもので、誰がいふのも同じものであるが、誰も黙つて聽いて呉れる。これは年の古い、初期以來出て居ると云ふことで、それが議會の老いた證據だ。若い人がどんなに調べて來て喋舌つたつて野次るんです。凡庸なことでも老人が言へば黙つて聽いて居ると云ふのは、議會が老いた證據だ。餘程老朽になつた。これは何か。何も私が善い事を考へたんでも、演説を上手にしたんでもない、唯白髪頭で初期以來ズウツと出て居る。それで聽いて居る。新たに飛び出して年齢が若かつたら、どんな善い事でも聽かぬと云ふ習慣になつて居る。此習慣を第一に叩き破つて見たい。それから今の我々のやつて居る政治の畑に於ても、非常に老人はかりだ、それで近頃の失敗をやつたと云ふのを段々と追求して行くと、その失敗はどんなのがあるかと云ふと現に今でも六十以上の

人が内閣に立つて居る。若い人も一二人はあるが、老人ばかりでやつて居るのでありますから老人が馬鹿になると云ふ譯ではないが、精力が續かぬのであるから仕事が遅れる。遅れた仕事は恢復がつかぬと云ふ事でありまして、先づ斯う云ふものから改める。モウ少し若い者を取り入れる。それには仕組を改めれば幾らでも出来るのであります。その仕組と云ふのは、横途に行きますから茲では申しませんが、私は豫て其主張を持つて居る。これは政治社會ばかりではない。何れの場合にも、例へば會社とか實業界の場合でも、本當に仕事をして居る者は三十分から五十以内のものであります。それが實際仕事をして居る。其上の者は唯擔がれて行く。丁度私が國民黨に居て國民黨の上に立つて居るが、仕事は誰がやるかといふと、その以下の者がやつて居る。今ではそれが間接になつて居るので、この働きを間接の働きから出て直接の働きにやれば宜しいので、會社の事業でも、政治の事業でも、實際働く者を直接に改めればうまく行くのです。これは確に出来る。このやり方を行つてやらうと云ふのが、——この木堂會では、餘談の事ではありますが、一體私が外交調査會などを主張したのは此意味である。老人と若い人間と分業をやるのは一番良い。老人と云ふものは何處が長所かと云ふと、智慧が勝つて居るん

でも何でもないが經歷が古い、何處へ行つても話が出来る便利がある。そこでさう云ふ者が大體を掴む、大體を見て居る。今の政治の仕事で云ふと各省總てを合した全般の政治と云ふものは手あきの者が考へて居ればうまく考へが出来る。老人にはそれを考へさせて置く。國務の全般と云ふものは爺さんの閑人に任せて置く。それから若い働く人は各省各省の實際の仕事を執る。若い働き盛りの人が各省に這入つて仕事をして、それから老人の、藥瓶でも持つて出ようとして云ふ人は、時々出て行つて大體の事を調べて行く。斯う云ふものを合して始めて圓滿に出来るんだと云ふ、今でも斯う云ふ考へを持つて居ります。丁度國政の上でいへば硬い言葉でいふと、入つては國務大臣となり出でては各省長官で、役所々々では各省の長官であるが、入つては全體の國務をやると云ふ實際さうなつて居るか云ふと、毎日々々忙しい仕事を内部でやつて居る。農商務に居るとモウ外務の事など考へて居る事が出来ない。そこで國政全體に亙つて大きな問題のあつた際には、平生から何も考へて居ないから、幾ら伶俐の人でもうまく行かない。それだから失敗が起るので、どうしても今の藥瓶の連中は引込んで、考へる、調べて行く、若い人が働いて行くと云ふ遣り方にならなければ行かぬ。斯う云ふのは之は獨り政治



ばかりではない。何の事業にも應用が出来る。此分業をやれ、分業と云ふより廢物利用をやれ斯う云ふ有様に總ての仕事をやつて行つて、老人も働ければ若い人も働く、働き盛りの者を老人は後ろから後見位の事をやる仕組に總てのものをやらせたい。一體今の外交調査會などは出來損ひであります。前の考へはさう云ふ考へでありました。今後と雖も斯う云ふ風にやりた。い。すれば人材が飛び出る。それも知らぬ間ではどうする事も出来ないが、寄つて雑談でもやれば、成るほど彼の人はあゝいふ長所を持つて居る。彼の人はあの仕事には適任だといふ事が判るのであるから、何も政治をやるといふのではない。一體に社會の改良をやらうと云ふんですから、一つに寄つて長所を知り合つて、それで提携して行く、斯う云ふことは六ヶ敷い事ではない、さう規則ばらぬでも出來易い事であると考へます。この點からいふと本堂會と云ふものがあつても、また副島會となつても何となつても、此種類の會が澤山出來ましたなれば結構だ、ところで近來斯う云ふものが宜からうと云ふので、各地方に斯う云ふ種類でやらうと云ふ事が大分に出來て來たのでありますから、これを一つ大きくして、何とかの宗教の立直しと云ふやう、その立直しをやつて見たい。立直しをやつて新たなものをやると云ふのは前に申す

通り、總てのものが變化時期になつて居るのだから、何う變化をするかそれに處するには斯う云ふ會があるのが宜しいと云ふので、この意味を以て機關雜誌の一年になつたと云ふ御祝詞を述べ、それと共に諸君の厚き御同情を以てお集り下さつたと云ふ事に對し滿腔の感謝を表します。

## 八巨 犬養翁と其の生涯(完)

昭和八年七月一日印刷  
昭和八年七月四日發行  
昭和八年十月三十日五版發行

定價八拾錢

著者 偉人傳刊行會

發行人 東京市神田區表猿樂町十三  
佐勝藤次郎

印刷人 東京市京橋區築地四丁目四番地  
鈴木茂



東京市神田區表猿樂町一三

會社 大 京 社

電話神田二四五九番  
振替東京五二二六三番

古書籍売買  
博文堂書店  
都立大学・八雲通り  
TEL (723) 2783



大 京 社 版